

動物の命、健康を守る — 京都微研と動物用ワクチン —

山中盛正¹

『株式会社 微生物化学研究所は、幾多の試練と紆余曲折を経て昭和23年6月18日京都市北部の紫野で誕生した。将に戦後の動乱期のさなかで、明日を夢見ることさえ不可能な時代であった。爾来、悲喜こもごもの星霜とともに、我が国の動物用生物学的製剤界のなかで、遅々としながらも独自の歩み続け、半世紀を刻してきた。永劫の時の流れからみればこの半世紀は瞬時にすぎないが、我々の印した足跡のなかには、永遠の灯といえるものがある。それは、我々の歩みが常に創造と実践であったことにほかならない。

動物用生物学的製剤、特にワクチンには動物の生命を守るというロフティーな使命が課せられており、我々は生産活動を単に、生業としてではなく、公共性の高い事業としての認識の下に営んできた。(中略)我々の生産活動は今後一層、経済の自由化の波にさらされることになろうが、社員一同、改めて来し方を想起し、変わりゆく社会の要請に応える努力を続け、来るべき二十一世紀を躍動の世紀とすることを願う。……』

これは当社の創立50周年(平成10(1999)年6月)の際に創業者・石田常勝(故人)が寄稿したものである。当社(京都微研)は、今年創立64年を迎えるが、企業としての理念には、創造と実践を旨とし、理論の遊びをよしとしない研究開発の風土が今も引き継がれている。斯界からは異端児と見られた民間のワクチン・血清の研究製造機関として発足した創業当初は、戦後の混乱とあいまって、物資もノウハウもない状況であり、その辛苦は想像を絶しよう。創業者しか知り得ない幾多の苦労は、我々後進への励ましの言葉となって今も伝えられている。

【創立期～桃山期(本社：京都市伏見区桃山)】

昭和24(1949)年4月1日 京都市伏見区桃山に本社研究所施設を設立した。当時の製造製品数は、豚コレラ豫防液をはじめとするわずか6製品のみであった。

YAMANAKA Morimasa: Ensure Animal Health. — The Progress of Kyotobiken with Animal Vaccines —

1. 連絡先：株式会社 微生物化学研究所 〒611-0041 京都府宇治市横島町24, 16番地

(2012年11月5日受付)

しかし、これらの中には、その後の当社の基幹製品となる犬と牛の製剤が含まれていたことは注目に値しよう。



写真1



写真2

【桃山時代の終焉—京都府宇治市への本社施設移転】

高度経済成長から公害(社会問題)への意識転換：高度経済成長にともない環境や公害問題が顕在化し、本社施設の移転を検討しなければならない時期が到来したと判断された。そこで、昭和41(1966)年に京都府宇治市横島町の現在地へ本社施設を移転することになった。

この地は良質で豊富な水量を誇る宇治川の辺にあり、当時は民家も少なくワクチンの製造・研究所として最適の地であった。ワクチン生産には良質な水を欠かすことが出来ない。水質の優れた宇治川に由来する豊富な水を利用できたことは、当社の発展にとってこの上ない幸運であったといえよう。

当社が本社施設を新天地に構えて、さらなる発展を願っていたこの時期、畜産業界とりわけ養鶏業界ではおりしもニューカッスル病の大流行が始まり、日本の養鶏産業に大打撃を与えつつあった。

当時、ニューカッスル病ワクチンは、製造にコストと労力を要する不活化ワクチンであった。当社は移転後間もない時期であったが、全社を挙げてその生産と普及に取り組んだ。このことは当社の事業と財務両面の安定化につながり、その後の研究開発体制の強化が可能となり、当社発展の基盤を確保することとなった。



写真3

かまぼこ型の施設 H6年まで使用した

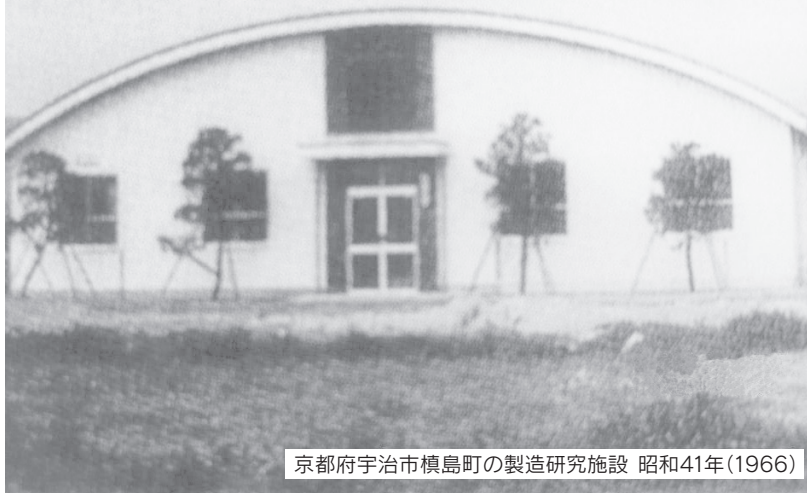


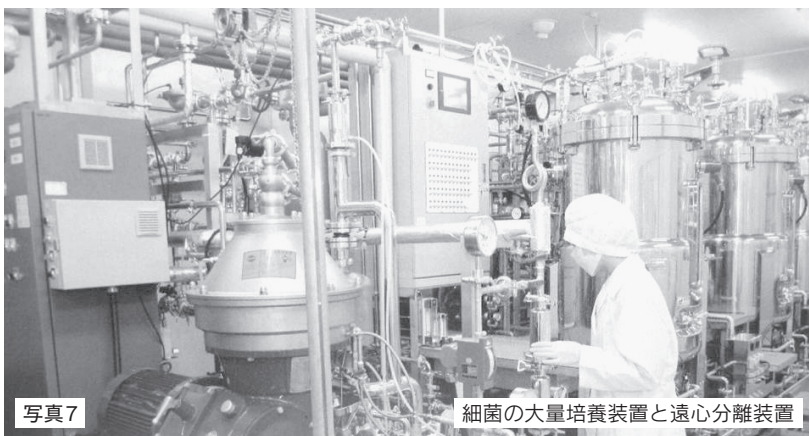
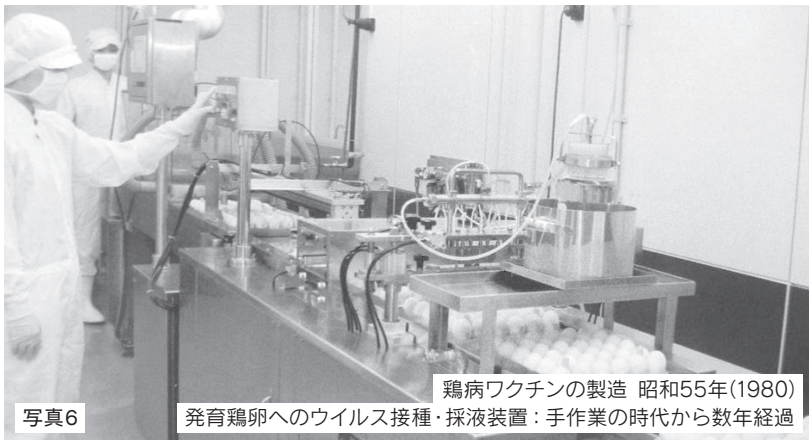
写真4

当社がこれまでに開発・製造したワクチン・診断薬は、牛、豚、馬、鶏、犬、猫、魚用製剤と多岐にわたり、製品総数は70品目を超える。それらの中には、産業動物や愛玩動物に省力的に応用できる多種混合ワクチン、当社オリジナルの牛の嫌気性菌ワクチン、ユニークな製品ではキュウリ用のワクチン(生物農薬)などが含まれる。

これらのほとんどは自社開発の製品であり、このことが当社の大きな特徴となっている。自ら開発・製造し、自ら販売して社会に貢献すること、これが創業当時からの変わらない京都微研の大切なポリシーである。

ワクチン開発・製造技術は、動物原料を利用する古い方法から、組織培養による汚染リスクの少ない安定かつ安全な製造方法へと変遷してきた。最近では技術革新がさらに進み、大量培養や浮遊培養化、遺伝子工学を応用した新しい手法へと移ろうとしている。

より便利な技術の導入は必要不可欠であるが、単なる新技術の目新しさに惑わされることなく、京都微研は今までに培われた技術と伝統を大切にしつつ、着実かつ独自の歩みを進め社会貢献を果たしたい。



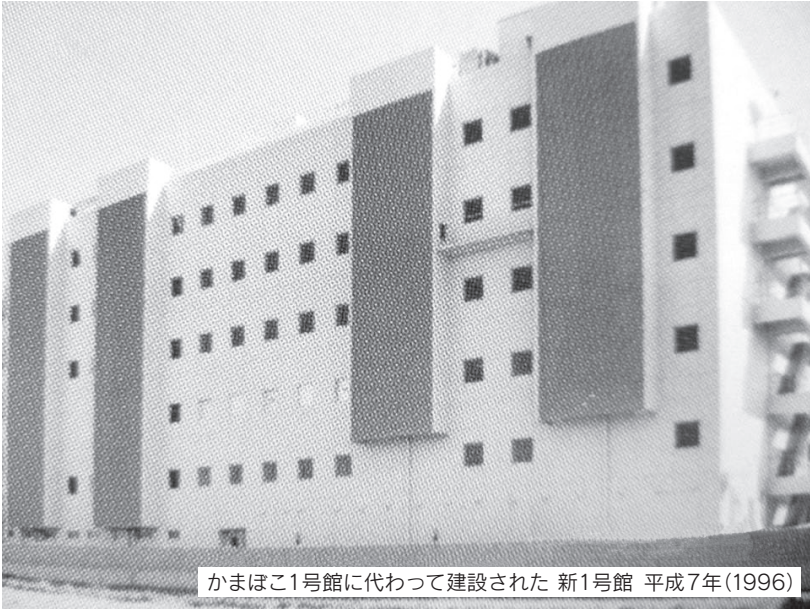


写真8



写真9